様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　３日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０５３０１０４
研究課題名（和文）言語の政治学についての政治思想史的研究

研究課題名（英文）Politics and Language in the History of Political Thought

研究代表者
小野 紀明（ONO NORIAKI）
京都大学・公共政策連携研究部・教授
研究者番号：１０１１６１９７

研究成果の概要（和文）：研究課題について、社会思想史学会で二度の「政治と文学」研究セッションを組織したほか（2008、2009 年）、芥川賞作家の平野啓一郎氏をゲストに招いて「政治と文学」座談会を実施した（2010 年）。また、それぞれのメンバーが研究課題についての個別研究を刊行した。代表的なものとして小野紀明『ハイデガーの政治哲学』（岩波書店、2010 年）と森川輝一『〈始まり〉のアーレント』（岩波書店、2010 年）が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：We organized two research workshops on “Politics and Letters” at the 2008 and 2009 SHST annual meetings, and a roundtable on “Politics and Literature in Contemporary Japan” with Keiichiro Hirano, the 120th Akutagawa Prize winning auther in 2010. Our publications on this research topic include Noriaki Ono’s *Political Philosophy of Martin Heidegger* (Tokyo: Iwanami Shoten, 2010) and Terukazu Morikawa’s book on Hannah Arendt and “the beginning” of the political (Tokyo: Iwanami Shoten, 2010).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：政治学
キーワード：政治思想史、言語

１．研究開始当初の背景

アリストテレスが『政治学』において人間を「ポリス的動物」と呼んだ際の根拠の一つが、人間の言語能力（ロゴス）であったことを考えるならば、言語の政治学――政治生活の中で言語が果たしている役割を理論的に明らかにすること――という研究テーマは古典古代にまで遡ることができよう。だが、現代欧米の狭義の意味における政治理論研究において言語の政治学というテーマが本格的に論じられ始めたのはごく最近のことであり、その最も代表的な論者であるマイケル・シャピロの作品から伺われるように（Michael J. Shapiro, *Language and Political Understanding*, 1981., Michael J. Shapiro, ed., *Language and Politics*, 1984.）、そこには、リチャード・ローティが（ベルクマンに倣って）「言語論的転回」（linguistic turn）と呼んだ 20 世紀初頭の知の大転換以降の人文社会科学における言語への関心――就中、モダニズムとポストモダニズムをめぐる激しい論争――が明らかに影を落としている（Richard Rorty, ed., *The Linguistic Turn: Recent Essays in Philosophical Method*, 1967. 新田義弘ほか編『言語論的転回』1993 年）。こうした文脈を踏まえ、ロマン主義、現象学、実存主義、

分析哲学といった様々な思潮における言語論の諸相を射程に収めつつ、言語の政治学なるものを政治思想史研究の中で捉え直し、その具体的な政策論的含意――たとえば先進国における討議デモクラシーの可能性や多文化主義における言語政策など――を探ること。これが本研究「言語の政治学についての政治思想史的研究」の基本的な問題意識である。

とはいえ、言語論的転回以降の知的状況をトータルに政治理論研究の中で扱うことはあまりにも困難である。そこで本研究では、現代北米を代表する政治理論研究者の一人であるスティーヴン・ホワイトに倣い、言語論的転回以降の言語の政治学を、(1)言語の「行為調整的」機能を重視するハーバーマス的な「行為への責任」論と、(2)言語の「世界開示的」機能に着目したフーコー的な「他者への責任」論の二つに分けて考察したい（Stephen K. White, *Political Theory and Postmodernism*, 1991.)。現代日本の代表的な政治理論研究者である杉田敦によれば、現代政治理論の主な課題は、政治社会における公共性――〈共通のことがら〉(res publica)――の理性的討議による問い直しと、政治社会の構成員一人一人の自我形成に影響を及ぼしている権力についての系譜学的考察の二つに分けることができるが（杉田敦・川崎修編『現代政治理論』2006 年)、前者の公共性論に関わってくるのが(1)「行為調整的」言語論の系譜――問題解決において言語が果たす役割を重視する系譜――であり、後者の権力論を支えているのが(2)「世界開示的」言語論の系譜――隠蔽された何かを顕わにするという言語の役割を重視する系譜――である。したがって、本研究が主な検討の対象とする政治思想史における「行為調整的」言語論と「世界開示的」言語論という二つの系譜は、公共性論と権力論という現代政治理論研究の二大トピックと、ほぼパラレルであるといっても過言ではない（斎藤純一『公共性』2000 年、杉田敦『権力』2000 年)。

本研究は、具体的な作業を進めるにあたって、政治思想史における「行為調整的」言語論の問題を「政治と言語」の問題として、「世界開示的」言語論の問題を「政治と文学」の問題として検討するが、この二つの問題は、研究代表者である小野が『フランス・ロマン主義の政治思想』(1986 年）以来一貫して追及してきたものであり、研究分担者である堀田、小田川、藤田、森川の四名もこれらの問題について幾つもの注目すべき研究成果を挙げている。また、特に「政治と文学」研究については、研究分担者としてではないが、いわば文学の分野における「実務家」として、芥川賞作家である平野啓一郎氏にご協力を頂く（平野氏からは、既に研究代表者である小野が行なっている研究教育において多大な協力を頂いており、本研究への協力についても内諾を得ている)。かくも幅広い観点からの言語の政治学についての共同研究は、国内だけでなく、世界的に見ても希有であろう。

２．研究の目的

(1)言語の政治学についての政治理論的研究

まずは、本研究の総論として、言語論的転回以降の様々な知的動向を踏まえつつ、現代政治理論における言語論の諸相とその政策論的なインプリケーションを明らかにすることを試みる。具体的には、本研究が前提としているホワイトの「行為調整的／世界開示的」言語論を中心に、現象学、実存主義、分析哲学の言語論を批判的に再構成し、その政策論的含意を、様々な事例に則しつつ、解明する。政策論と直結する具体的な問題としては、「第二の近代」としてのリスク社会へと向かいつつある先進各国のデモクラシーにおける討議（deliberation）や、多文化主義における言語政策（language policy）などを扱う。

(2)「政治と言語」についての思想史的研究――「行為調整的」言語論を中心に

次に、第一の各論として、政治思想史の中で言語の「行為調整的」機能がどのように論じられてきたかということを、様々な思想家の言語論の歴史的分析を通じて検討する。まず、ヨーロッパに古典古代の詩学や修辞学が繰り返し論じられてきた伝統があることを踏まえ、その中で政治がどのように扱われてきたかを、様々な思想家のホメロス論やウェルギリウス論の分析を通して検討する。また、ロマン主義とそのバリエーションとしての現象学や実存主義において、更には、ある種の反ロマン主義としての経験論や分析哲学において、言語の「行為調整的」機能がどのように論じられてきたかを、Ｊ・Ｓ・ミル、ハイデガー、アーレント、カミュ、サルトル、バーリンらの著作に即しつつ、思想史的に考察する。

(3)「政治と文学」についての思想史的研究――「世界開示的」言語論を中心に

第二の各論では、政治思想史の中で言語の「世界開示的」機能がどのように論じられてきたかを扱う。リチャード・ローティや井上達夫がいうように、政治的意味空間において「存在の無限の豊饒さ」を顕現させる言語の「世界開示的機能」は、ある種のアイロニーとして政治的リベラリズムを支えてきた（Richard Rorty, *Contingency, Irony, and*

Solidarity, 1989. 井上達夫『普遍の再生』2003 年)。この「世界開示的」言語論を思想史的に検討するには、古典文学の伝統も重要であるが、それ以上に、内外の近代文学者との対話が不可欠であろう。そこで本研究では、アーノルドやサルトルといった近代の様々な文学者の「政治と文学」についての作品の思想史的分析を行う一方で、近代文学の実践に携わっている作家（具体的には芥川賞作家の平野啓一郎氏を念頭に置いている）との対話を試みる研究会を実施する。

３．研究の方法

(1)言語の政治学の政治理論的研究

まずは、本研究の総論として、言語論的転回以降の様々な知的動向を踏まえつつ、その政治学的なインプリケーションを理論的に明らかにすることを試みる。具体的には、前述のホワイトの「行為調整的／世界開示的」言語論の他に、解釈学における〈地平の融合〉や分析哲学における〈通約不可能性〉をめぐる議論の蓄積を踏まえつつ、現象学、解釈学、実存主義、分析哲学の言語論を批判的に再構成し、その政策論的含意を、リベラル・デモクラシーにおける価値多元主義や多文化社会における〈承認の政治学〉などの様々な事例に則しつつ、解明する。

(2)「政治と言語」の政治思想史的研究――「行為調整的」言語論を中心に

次に、言語の政治学の第一の各論として、政治思想史の中で言語の「行為調整的」機能がどのように論じられてきたかということを、様々な思想家の言語論の歴史的分析を通じて検討する。具体的な作業としては、〈共通のことがら＝公共性〉を問い直すという「行為調整的」言語論の系譜を古典古代の言語論に探ると同時に、近代における様々な言語論の展開――たとえばリチャード・ローティがロマン主義期に見出した〈世界を映す鏡〉としてのミメーシス的言語論から〈内なる感情を燃え立たせるランプ〉としてのポイエーシス的言語論へという変容など――の中で、言語の政治学が、どのように発展してきたかを思想史的に考察する。

(3)「政治と文学」の政治思想史的研究――「世界開示的」言語論を中心に

第二の各論として、政治思想史の中で言語の「世界開示的」機能がどのように論じられてきたかを、特に文学との関連において検討する。具体的な作業としては、政治思想家の文学論や文学者の政治論、更には様々な文学作品を政治思想史の観点から読み直し、従来専ら非政治的な文学的創作と見なされてきた営みの中に秘められた政治的ポテンシャルを探るとともに、実際に文学的実践に携わっている作家（具体的には芥川賞作家の平野啓一郎氏を念頭に置いている）と言語の政治学についての対話を試みる研究会を実施する。

４．研究成果

(1)総論――言語の政治学についての政治理論的研究

①2008 年度：分担者の小田川が、政治理論における言語論の重要性を強調するチャールズ・テイラーの自由論についての研究報告を政治思想学会 2008 年度研究大会（於岡山大学）で行い、また関連する小田川の論文が学会誌『社会思想史研究』第 32 号（2008 年 9 月）に掲載された。

②2009 年度：具体的な成果としては、分担者の小田川が、政治理論における言語論の重要性を強調するジョージ・ケイティブの民主的個人性論についての研究報告を社会思想史学会 2009 年度研究大会（於神戸大学）で行ない、メンバー間での情報交換、問題意識の共有に努めた。また関連する小田川の論文が荒木勝・鐸木道剛編『東アジアの「もの」と「秩序」』（大学教育出版、2010 年 3 月）に収録された。

③2010 年度：著作として、研究代表者である小野紀明が『ヒューマニティーズ　古典を読む』（岩波書店、2010 年）を、森川輝一が『〈始まり〉のアーレント』（岩波書店、2010 年）を刊行した。関連する論文として小田川大典「充実の変容と危機」が荒木勝ほか編『東北アジアの幸福観』（岡山大学出版会、2011 年）に、また藤田潤一郎「書評：『人権の政治思想』」が『無教会研究』13 巻（2010 年）に、森川輝一「政治と連帯の間」が齋藤純一編『政治の発見 第 3 巻 支える』（風行社、2011 年）に収録された。

(2)各論――「政治と言語」「政治と文学」についての政治思想史的研究

①2008 年度：本研究の各論部分についての学会報告としては、社会思想史学会 2008 年度研究大会（於慶応大学）で「政治思想と文学」セッションを開催し、分担者の堀田と森川が研究報告を行ったほか、森川がボストンで開催された国際学会で研究報告を行った。また、関連する森川の論文が『政治思想史研究』第 8 号（2008 年 5 月）と『理想』第 682 号（2009 年 2 月）に掲載されたほか、関連する翻訳として、分担者の藤田が関わったウォルツァー『正しい戦争と不正な戦争』（共訳、風行社、2008 年）と、協力者の乙部が関わったコノリー『プルーラリズム』（共訳、岩波書店、2008

年）が刊行された。

②2009 年度：各論部分については、まず著作として、研究代表者である小野紀明が『ハイデガーの政治哲学』（岩波書店、2010 年）を刊行した。また、論文としては、堀田新五郎「倫理から政治へ」（『奈良県立大学研究季報地域創造学研究』20 巻 1 号、2009 年）、藤田潤一郎「情念とその浄化――『創世記』を巡る一考察」（『創文』525 号、2009 年）、森川輝一「ジョージ・ケイティブの政治理論について」（『名城法学』59 巻 2 号、2009 年）が公刊された。

③2010 年度：本研究の各論部分については、2010 年 9 月 17 日に作家の平野啓一郎氏を招き座談会「政治と文学」を京都大学吉田キャンパスで開催した（その成果は 2011 年度中に冊子にまとめられる予定である）。関連する論文として、堀田新五郎「20 世紀精神史における「実存」の境位」が『地域創造学研究（奈良県立大学研究季報）』21 巻（2010 年）に、森川輝一「「物語る」ことをめぐって――デモクラシー時代の「政治と文学」」が『名城法学』60 巻別冊（2010 年）に収録された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①森川輝一、「物語る」ことをめぐって、名城法学、第 60 巻別冊、査読無、2010 年、488-514 頁

②堀田新五郎、20 世紀精神史における「実存」の境位、地域創造学研究（奈良県立大学研究季報）、査読無、第 21 巻第 1 号、2010、85-115 頁

③堀田新五郎、倫理から政治へ、地域創造学研究（奈良県立大学研究季報）、査読無、第 20 巻 1 号、2009、13-41 頁

④森川輝一、ジョージ・ケイティブの政治理論について、名城法学、査読無、第 59 巻 2 号、2009、111-128 頁

⑤藤田潤一郎、情念とその浄化、創文、査読無、第 525 号、2009、14-18 頁

⑥森川輝一、国無き者をめぐって、理想、査読無、第 682 号、2009、25-35 頁

⑦森川輝一、『全体主義の起源』について、政治思想研究、査読無、第 8 号、2008、116-145 頁

〔学会発表〕（計３件）

①小田川大典、ジョージ・ケイティブ『インナー・オーシャン』を読む、社会思想史学会第 34 回研究大会、2009 年 10 月 31 日、神戸大学国際文化学部

② Morikawa, Terukazu, "The Space of Appearance Appears among Strangers: Reconsidering Arendt's Strange Quotation from Oedipus at Colonus in the Last Page of *On Revolution*," Annual Conference of Northeastern Political Science Association, 14 November, 2008, Boston, USA

③堀田新五郎、フランス実存主義における政治と文学、社会思想史学会第 33 回研究大会、2008 年 10 月 26 日、慶応義塾大学（三田）

〔図書〕（計３件）

001：小野紀明、岩波書店、ハイデガーの政治哲学、2010、509 頁

002：小野紀明、岩波書店、ヒューマニティーズ 古典を読む、2010、98 頁

003：森川輝一、岩波書店、〈始まり〉のアーレント、2010 年、434 頁

６．研究組織

(1)研究代表者
小野 紀明（ONO NORIAKI）
京都大学・公共政策連携研究部・教授
研究者番号：10116197

(2)研究分担者
堀田 新五郎（HOTTA SHINGORO）
奈良県立大学・地域創造学部・准教授
研究者番号：40264874

小田川 大典（ODAGAWA DAISUKE）
岡山大学・社会文化学研究科・教授
研究者番号：60284056

藤田 潤一郎（FUJITA JUNICHIRO）
関東学院大学・法学部教授
研究者番号：20329204

森川 輝一（MORIKAWA TERUKAZU）
名城大学・法学部准教授
研究者番号：40340286

(3)研究協力者
平野 啓一郎（HIRANO KEIICHIRO）
作家
研究者番号：なし